



門へ13 特  
號 1833  
卷 70



繪本古図記六篇卷之十目錄

明使渡海日本兩方子送朝鮮話

を古図龍臥船を渡して明使と御食後「終る國

朝鮮の兩方子送りて都又冷る國

古圖朝鮮之戰ぬ出火討話

瀬川糸女が妻女書と朝鮮に送る國

石田増田大谷が出陣

朝鮮に送るが女乳と終る國

傳丸進渡君に相見して

三威が意と述る國

繪本古図記六篇卷之十

晋州城合戦話

日 國

後及又去清贛韞車と作る國

晋州城陥落乃國

明兵帰國話

外長沈惟敬を罵る國

右岡名漢屋陣中用瓜島話

日 國

後及又去清贛六之助斬虎話

日 國

繪本万国記六篇卷第十

明使渡海日本両天子還朝鮮

元海は日本教十負の人の十餘万乃軍勢を若山府名谷山浦名  
 屯して明朝より官使日本は渡海し和議の盟約密く調て後及を  
 子及び捕の舟朝鮮(海)を以て度し沈惟敬名が伴(中)通ト  
 けいば大明の軍を李如松名が中知して沈惟敬名徐一貴名附用三人を以  
 て日本は渡海せしむる間其を去けしめを以て甚く其の給ひ給ひに紫下総守  
 勝雅又佐て三人の明使を逐(させ)名獲屋の旅館に住し入る摩惠多ら奉  
 相奉家卿朝押授(い)ち彌永政右回和泉守建部孝徳小西如清近江  
 親善守(い)ち令し移(つ)く西使を御意進(ま)じり給ふに時明朝より金帛  
 玉宝乃給ひ殿(い)ち誠(ま)じり進(ま)す其の奉(ま)る云より且又多くの金銀衣



豊左図  
龍既を  
海へ  
明後  
御食  
図



豊左図

服之乃獲刀を押し給ひ抑け名獲屋の地を平ら西乃方洋く居  
大海濶く倭の方屈曲して海を圍繞するより百余町風系絶え  
方は明の三度大い勝地を覺詩を繼いで其心を傳ふる左衛門守  
るはく明人の身と惜さんとも教百艘の大船を海とよ渡し諸  
家の旗幕凱風を翻揚し三老將本と湯に飲の旨きと揚ぐる固  
り又河原松より酒出れを振ひ入り目を強しむ虎尾の精滄二  
百年令造の長刀又十柄船の首より森林と住りするは飄受乃大  
馬印輝く後潮風を飄り還卒三百余人一揆は甚深の地獄と  
碑とをて河松を供ふは河松の明の三度を傳へ入る酒宴を  
没け給ひ就世令去の後樂は石を海とよを能く傳ふる激は希の  
餐は明人古國の威勢を驚かす氣と龍心を傳へし更に言ひな

曰く  
其其日河津の地はくを賜ふ既して明使等賜と若  
て國よりくくは來る古外書と授けて明帝に送らるるを文  
日本國王豊后守の奉書

大明皇帝是下

明帝與吾國和親若不信則吾亦何渝明皇帝山嶽海峽  
可相比者乎汝則邀大明皇帝之淑女可備於奉朝后  
妃之位焉兩國素未相為毒螫故述事不贈勅命然今  
若和平奉就則必可遣之和親故之後兩國之權臣共  
通好其辭其自去年遣使相報葦花戎朝辭湯幸其都  
邑更列其人哉而今美國慈取吾言則不顧朝辭之眾

朝鮮の  
西王子  
許され  
て都  
久の  
國



遂割其八道以四道授李松其餘四道者吾領之耳若  
授以道則使朝鮮王子及大臣一二人入朝  
而已矣國其勿訝焉

かむとく徳めとせ明の後より一汝の附用辭人徐一貴名沈惟敬を遣ひ  
書簡を受取辭して汝國はしうろろを固よりも因反飛彈守と御使  
し令山浦名又號しめ加茂小西石田増田等乃諸大將も中令めらるる  
和睡のり大明盟よそひくろく人の徳海律の名 順和輝の名の二王もと朝  
鮮よゆししとしと御中知りしけ附明の大軍いさし退り王城よ此し當り  
居るより小西約長石田増田が實情は二が両方とせ捕しるるをと極  
明國の善法しあひりて両方より及せ捕の後臣なるも朝鮮へ返し  
しるけ両方より來年が御使に當りて擣うた月日を送るる小西は

情深き大將を幸生し心を好む夜食のゆい云はし及び此に事  
おろのゆい付るも心を慰らゆらるるは御食應したる二人の言  
子腹を満して沖志と風どろろるるが今朝鮮の王城へ放ち返さる  
し海よ情心の情心と勢ひ情心の家臣加茂右馬允よ付て之簡  
と寄せ厚き惠と謝しを書よ曰く

朝鮮兩王子徳海律順和輝兩府夫人陪官長溪と洛  
幼護軍大將南兵使等自壬辰年日月被捕日本大將  
軍計既信入城相見即加被過一幼下人并給夜食  
極恤願至又稟于園白殿中到令山浦還許放送系城  
其慈悲如佛真箇日本中好人也况素聞園白殿中雄  
傑無比に隣結長之且若放分別待隣國王子諸官稍

存舊志其後海使獲于系其恩厚與此海俱深一乃  
之人其故亦忘後日若對日本及計既復發難治少  
背負之志取人信也天地在邦共知之矣修好之日通

書寄信東

清いけ書と得て承くおの祿とせり扱も朝鮮は日奉勢益山浦  
の退き両方子海朝の上り大王李昭も義例をわく用機は来り  
人民少し安堵の思ひは信「るされが大明の朝廷にも今度目を奪  
朝鮮の王城と退きうり日馬石曾人及び沈惟敏が功なりとて存  
く恩賞とせりしけれ沈惟敏が威勢が實大明朝鮮の間に輝き  
世人こそぞわうの中なり

を國朝鮮之我の賞罰

同年六月吉國使吉の派系石馬女然若内務元西人を朝鮮は後  
海で今度の合戦は扱ひく功を臣「乃士加友清正小西初長及  
い小又川良美瑞志摩橋を舩舩より乃卒功にる者又忠節と福  
ひ感状をとり給「冷人具又大友義統が臆病者代奉守の曲りなり  
とてを國と右とら加友を計既は然るを外怯弱比真の賞教人ま  
外國を右放さる實は龍造寺澄信の家臣津川采女心とく者ありけ  
度は軍級より朝鮮は渡海せり妻たり各瓜分するより小控  
橋津守娘之紅に給りてさび「き國乃中は孤兒外て朝夕は愛女  
心と悲悲し「露忘る渡りくをり片増計と文は徳り文徳は純  
便船は礼を「るを舩送風は折舞後れ文徳は日本の地博多の  
浦は浪はあらし流は忘るる浦人よりてましくも瓜分を國の



世の川  
糸女心が  
妻書と  
朝解と  
送る  
園



上洛に入きて小寺の法受しく心海く書はしる女の換其の者  
おしひば人なる法を海に真よあり

かいつん幼承し知て教はる我心をばたきかこん

右圖にまれば思しめされ采女と改朝せしめ給ふ菊子世より世に  
かぎりなく又第一首よみて尼若花多に寄は初を圖の清をに置し

身ればと後ある歌よ

物毎の表はみだむむらまの神の心よ代る君ぞとて一き

附よそ多しとる七月の始りありたりと大明より和義の返報をよ

より右圖の神中知して朝押強心多如炊西人朝鮮國よ渡海先後田

中絶言多家の神よ入る右圖の命と修を執りては諸大お晋州の城

を表りよども後り法りばを候よにぬるよ玄甲斐はし今度諸の道

く進んで晋州を表換る朝押多きの西人軍渡り加つて大ね牧

司名首を足んばしと神渡りり多如漢で是とぬり晋州大ね

よけ首と觸せしけれんく浮田の陣中よ来り朝押多きの多りの

多洋を候ひ多れを中よ右回治部少輔増田右衛門尉大谷刑部三人

海く来り対面せんといけ附朝押多きの西人基と困んで餘表はし

右回増田大谷少輔例よ神しと漸くはしれんく強心如炊困基の時負

よ心をあせ右回が方をけん向らせは三成心中よ大よ怒り増田大谷小

同くなせしと神とまき退きたり是より互に強心をばしとて其の候

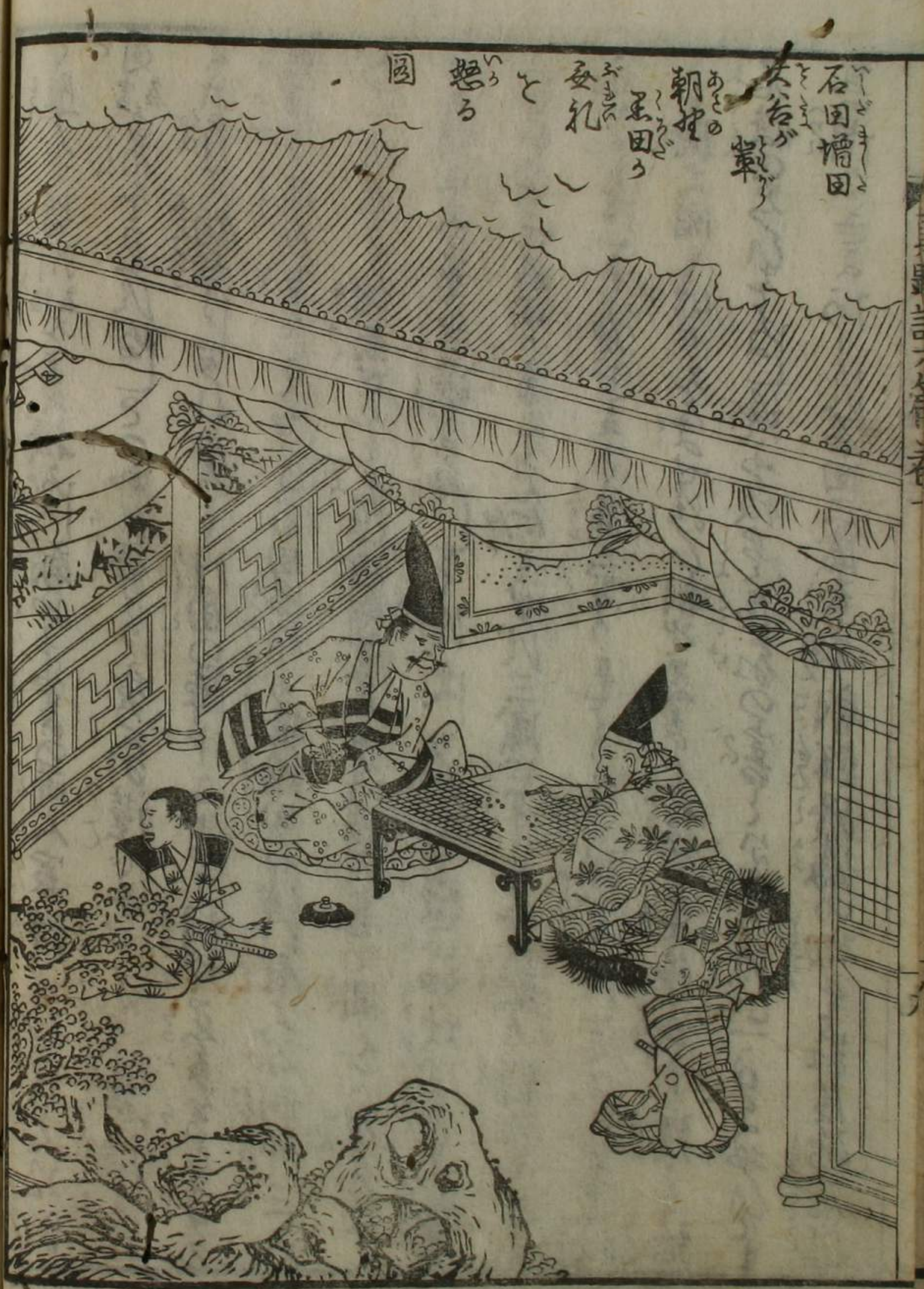
より大圖もけりをばせ給ひ朝押多きの多如候を表給ふより後多給

各候のそのいをばし候はは多如家の宮といかりぬけしりよはゆい

其の謂なきよつり右回三成を奉朝鮮渡海の初を家臣海に渡

其の謂なきよつり右回三成を奉朝鮮渡海の初を家臣海に渡

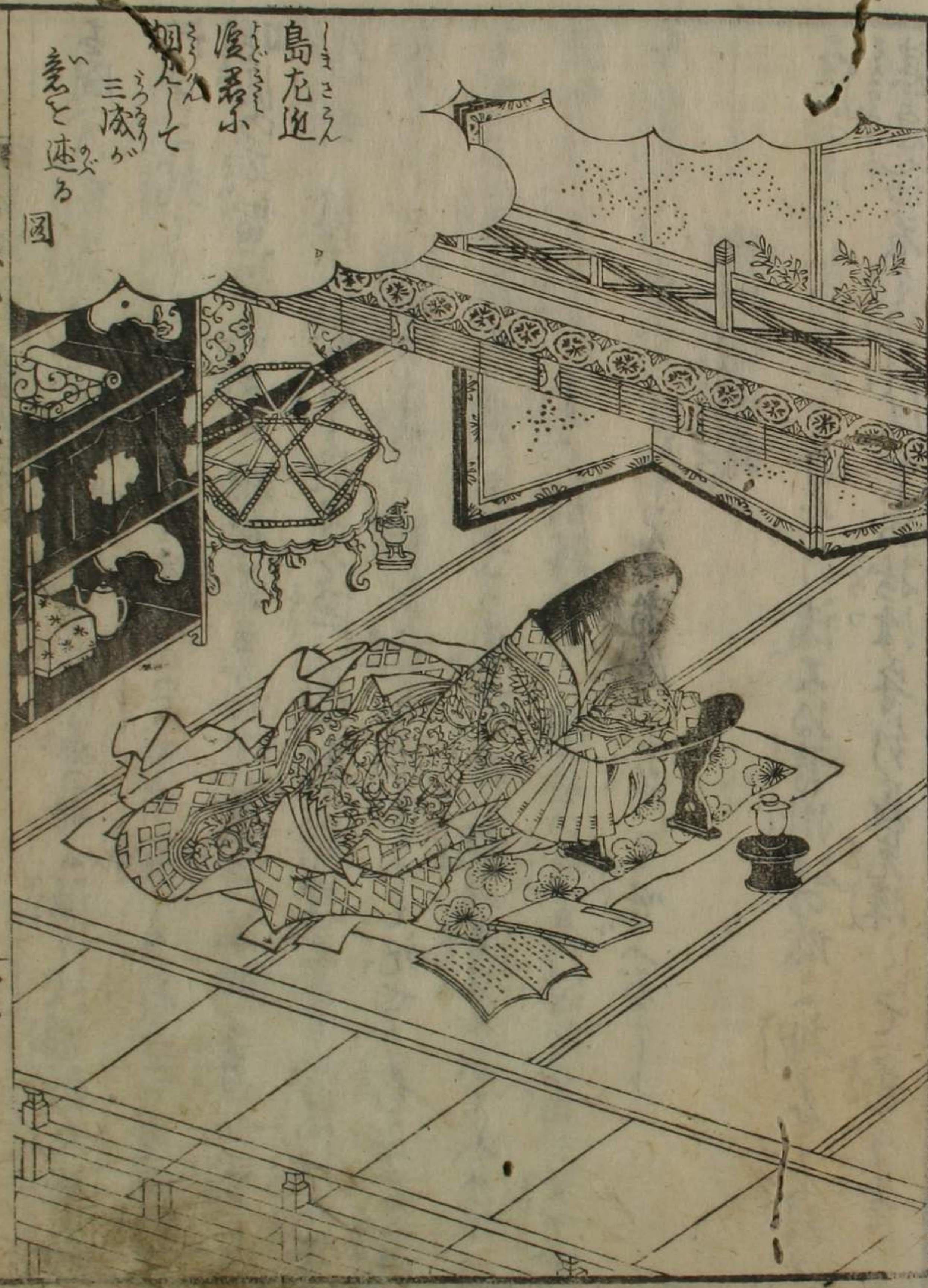
其の謂なきよつり右回三成を奉朝鮮渡海の初を家臣海に渡



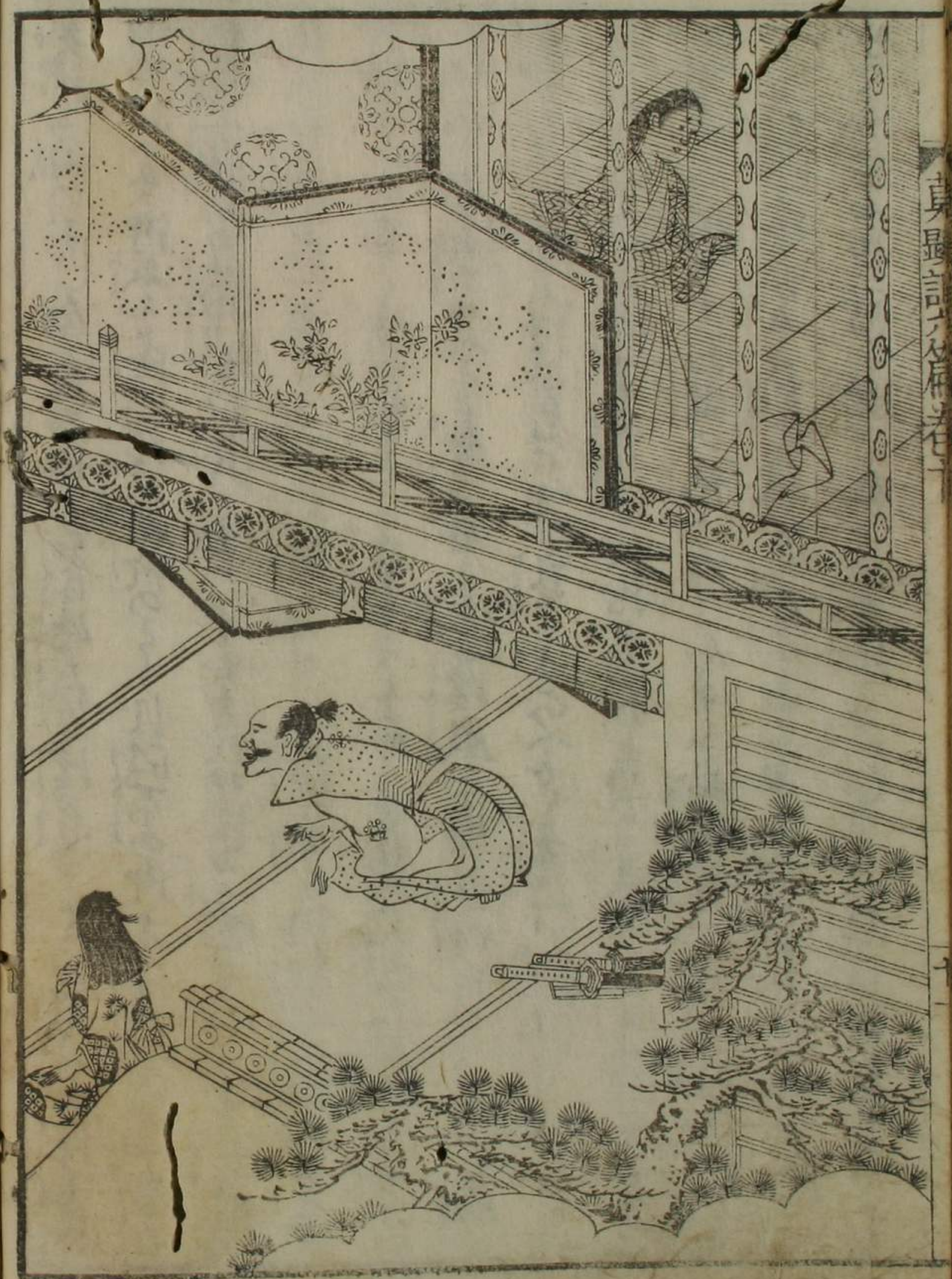
石田増田  
大谷が  
朝控  
玉田  
ふまの  
安礼  
と  
怒る  
國

密に大坂に登し、後君は福一中とせらるる日本軍勢を石をうく  
 暇の大軍はあつて難き所にて左衛門尉の心を勞し、終つてのどく  
 て、敵軍を終つたは君を奉と編り終つる速りた。後三藏大朝  
 鮮と和を結び、征伐を休むと欲し、希く女君の長書に福の  
 三藏と志と合させ、和談成すに、終つて諒略の次第は、  
 とゞれ、後君元来三藏が秀才を遣し、終つてに、石に於て、  
 三藏の三藏とたゞ、終つて、和を要く、終つて、別の後を、  
 長と送り、終つて、後君は石田と略に、沈惟敏、  
 誘ふ、日本大明和談大才、調い、う、後君の、  
 日の、  
 政所は、  
 小西の長、  
 認明、  
 い、  
 が、  
 こ、  
 氏、  
 の、  
 報、  
 心、

後君は石田と密に、  
 小西の長、  
 認明、  
 い、  
 が、  
 こ、  
 氏、  
 の、  
 報、  
 心、



島九郎  
後若小  
三成が  
意と述る  
図



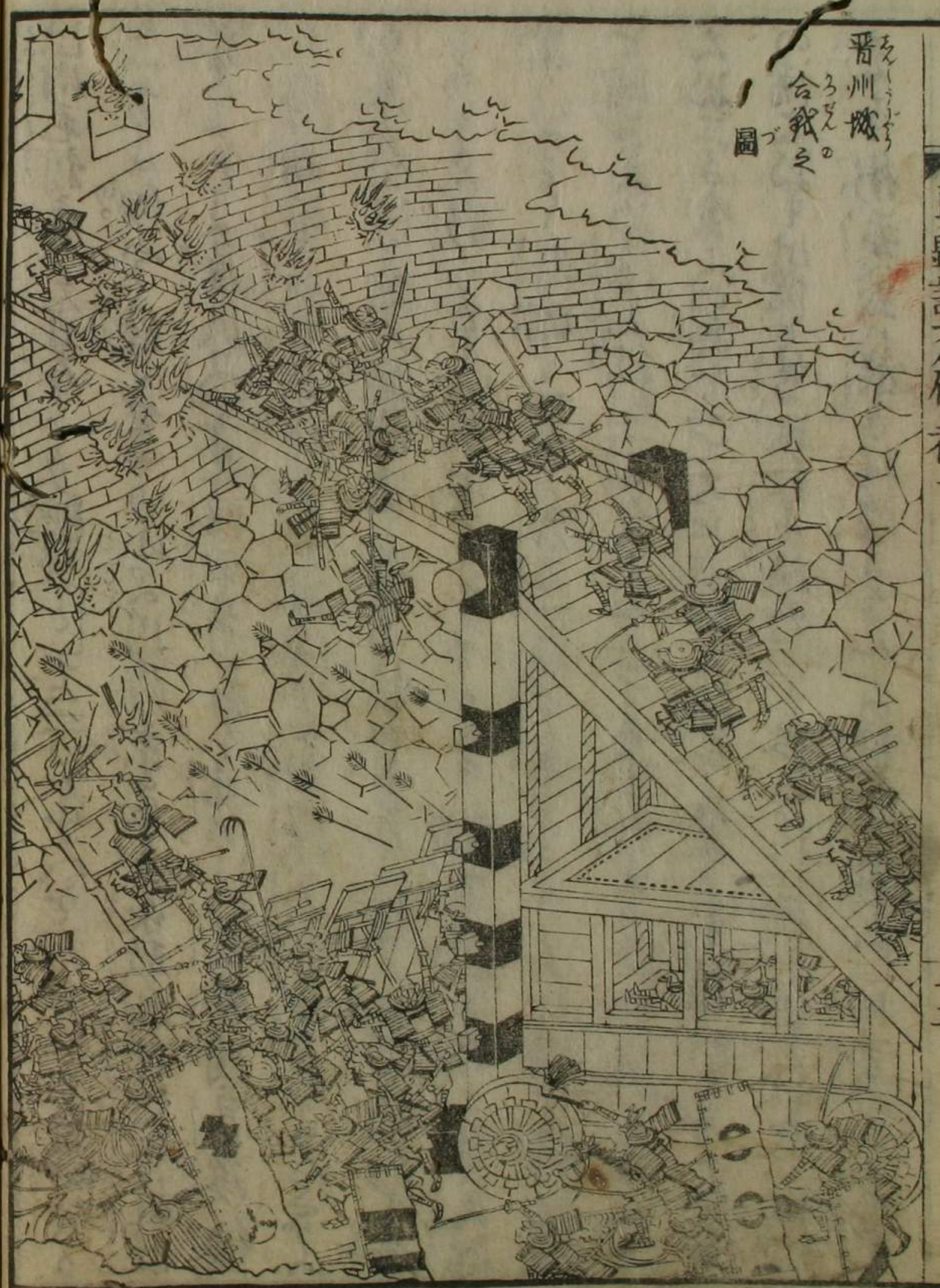
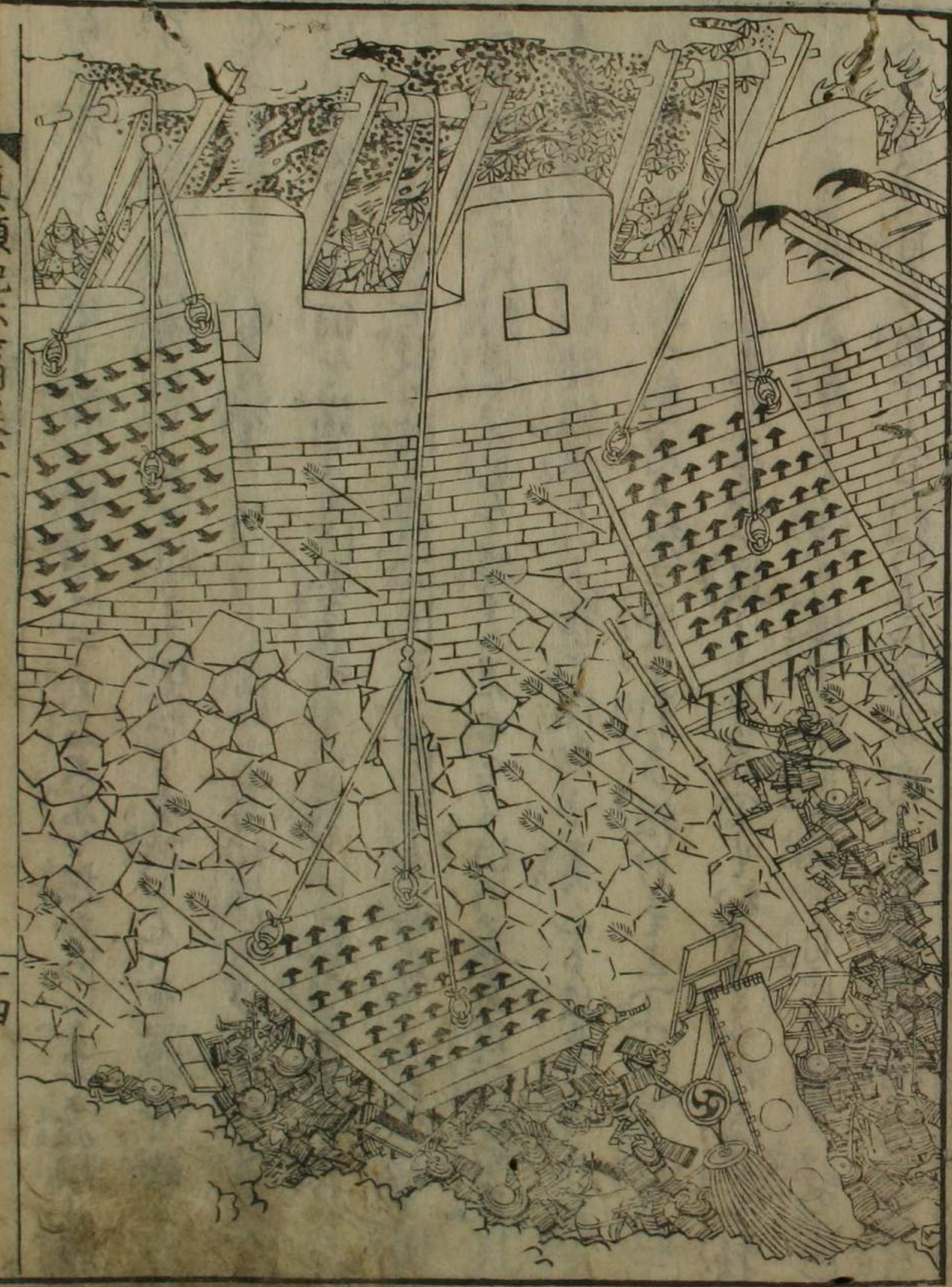
真景言六篇卷

を固（乃密義方らぶ）と心を定めけ固基の附（限）に朝鮮在陣の間  
 何ゆゑ就て小西石田等（不敵）失云の（り）度（る）れども三歳（又）此  
 晴（凡）の才智（ら）き（び）よく朝（中）に（ま）まが心中（と）あ（ら）し小西（又）若（く）曲（て）  
 此（と）怒（り）て（は）し（ら）び（さ）り（び）日（を）包（む）ぬ（ら）し（ら）朝（中）に（ま）まが心（後）終（つ）ふ（か）  
 又（り）り（は）し（ら）諸（書）（を）基（を）固（ん）で（れ）と（ま）ふ（と）の（と）記（せ）り（是）（の）を（洋）  
 又（せ）ざる者（之）朝（中）に（ま）まが（さ）る（勇）武（の）如（吹）又（英）才（を）以（て）人（は）漢（  
 此（を）固（の）命（と）令（し）遠（く）朝（鮮）（を）入（り）固（基）の（載）（し）心（と）集（ま）る（命）  
 を（急）慢（せ）る（愚）人（ら）（ん）や（る）者（は）（さ）し（ら）し（て）味（を）な（さ）し

晋州城合戦

右國の御（知）れ（し）る（日）本（の）諸（大）將（晋州）城（の）攻（め）押（し）を（討）つ  
 其（急）（に）加（て）る（討）つ（は）し（ら）西（接）津（守）外（長）先（陣）（と）して（一）番（は）（ま）る（る）

け附（毛利）秀（元）日（本）（を）す（り）加（勢）（と）して二（万）余（人）（を）引（率）（し）（志）道（）  
 が（一）方（は）向（つ）攻（め）せ（り）小（小）川（澄）系（長）（永）政（朝）中（に）強（心）達（政）  
 峯（等）（先）（は）屬（以）（又）二（方）（は）原（田）秀（家）（を）始（り）（し）志（摩）國（良）廣（備）  
 志（摩）尚（經）長（曾）我（部）元（親）勝（頼）（等）（は）心（構）（守）（を）先（は）（ま）る（る）  
 九（軍）兵（一）万（余）人（裨）旗（雲）（と）貴（き）槍（刀）日（光）（は）耀（き）固（を）包（む）て（美）  
 たり（る）（鞍）（と）し（ら）ん（方）（を）さ（り）り（り）柳（晋州）城（の）攻（め）と（謂）（は）大（江）  
 系（に）あ（り）（る）危（険）（を）三（方）（の）岩（石）礮（臺）（と）立（つ）（と）く（と）一（端）（と）構（校）間  
 と（開）（き）大（約）除（元）九（人）二（万）余（人）（を）以（て）先（と）守（ま）り（又）鄒（延）（と）り（明）の  
 大（約）三（千）余（人）（の）兵（と）以（て）大（丘）府（）（を）陣（を）立（し）奇（角）（の）勢（ひ）（を）さ（り）分（本）  
 の（諸）大（將）（は）城（と）固（固）に（表）接（離）（と）し（ら）ん（は）柳（折）（を）組（上）げ（て）或（は）柳（竹）  
 系（を）衝（突）（さ）し（繩）踏（ま）り（ん）ど（の）攻（具）（と）用（意）（し）柳（折）（を）く（美）宅



晋州城  
合戦の  
圖

真景記六段卷下

らんこけととも城中防ぎ堅固はして大石大木と投ゆらし矢と放りて遠  
 ざるく歩み表傳てりんらんどもけ城を責極どんが石圍の衝懸りぬ  
 んみを思てく令ぬ捨くひりくと解り奇切得よふぬけをふんて  
 けけ耐城中より相を湯まじりきるの中へ前らしし松明を以て表具を  
 焼立りぬ入水に改め防ぎ鐵(い)はじり勇に日本勢やどいぬがれぬ樹  
 こ足少攻只ぬ引退き身を焼くん令せりけ耐是ま永政の家臣後  
 及又ま清政次基次 贛韞車とらぬ物を焼出り美んとは是れ厚き板を  
 以て龜甲形に箱を制(し)内は強き梁と敷き設けを上(す)半の生皮と敷  
 板張付しれい小大木大石を投ぐるるといどもおどりよの車を換  
 せざるよまをばしを中より鉄の棒を以て進退を自由せりぬ船の  
 又ま清政次自ら數十人を引つとけ車乃内に入晋州城の橋の中へ相付

石圍の角石を投てて  
 中(ちゆう)火器(か)を射るる雨のどしとらどもよ車と換とるの能りぬ急  
 なる程は隅石に引換さるるとも堅固の石垣七八間が程尾尾ありと  
 崩とれたる目まほしきもの働きて清く陣中より一人の兵部より出  
 晋州城の一番系は清く内(うち)森を伐ちまて石をやり帰れぬぬけを  
 んと及是まが向(むか)ふ山後後や南五三三宝後とらりと森を以て橋を  
 へし城中より射ゆ矢篠を乱れがく先は進し森を伐ちて内(うち)懸  
 よま一ツ的の後まよふ橋よりなり粟山毛とんとく橋後や一番系とるま  
 よの道が加差が石居飯田南兵衛とるま川く粟山が上(う)り相(あ)いり  
 南五三三法達美師の旗とらと藤をせ清く内(うち)飯田南兵衛晋州の二とん  
 各中(ちゆう)のれがよまが勢加差が勢一耐(いち)とらとらよまといくまして各(お)こ



後發  
又去  
輓  
車  
也  
國



真田吉川合戦

廿五

真田巴

わら城の中朝鮮人せんくを執り奉九にして釘入る瓜山門のたお  
金子猛名けの板をくく城いとる落うるとこの款を奉るざるをされよ  
漢と立て遁出せば日本勢得う望しと込入くあるを奉り切例  
款と討り殺をくくはけ討熱軍一日進西の方より毛利秀元小  
川澄系朝中強心達政峯等周を地つて系破きい東より浮田秀家  
志摩國良廣福志摩尚繁長曾我邦元親勝須賀家正等我後止じ  
と突て入加友小西忠多が勢と儲くも一人も漢とよと罵て老若男女の  
婦ひる朝鮮人じ目にとり行場より切例血の浪と奉て戮よを令  
ふ猛人名崔慶會人兩人を瓜元紐で真石樓名のりより大川の中へ送み  
牙を投て危のあ屑とあう多し瓜城の地大なる徐元礼人殺す石のま  
抄い城外の竹藪の中へ送き入りしを浮田秀家の居園を指し懸とよ

者搜し出り首をたうそ非名の大ぬ十八人上下の軍兵斬殺さうその  
まら又三百余人を余り或り岩原は福と出たより殺して碎け記し  
瓜河あつ瀧と溪谷に例と命と奉る者数千人を殺し瓜元礼  
州城中外のあ者年馬駒をよあると悉く殺し盡し殺飽す瓜  
やあらん城と燒き場を埋し狼藉するあ換り月もつてらぬ次方なり  
日本勢大に討勝凱歌を唱へて金山浦名より香州名落城の始地端  
ぬのまゝ名瓜名渡倉表へ進し且大なる槍元礼人首を城に淹しを  
筒の上流よこそ入りたり

明兵率帰國

朝鮮王李暉の用城府にゆりていき二月をもちてころ小日本勢香州  
名の城と端と軍兵を斬殺するゆを安大さし歸ると明の諸大なる志

7:13



真蹟言六篇卷十

1:1

臨瀛の國 晉州城



真蹟言六篇卷十

を著るる日掃の園と引かざしけ耐明の大軍を如松人の王城に陣をたは  
惟忠の山府に在陣劉延の先より兵府に勢を引け日本  
勢の鋒先と恐るるや攻められ安き心の内李如松人の沈惟敬と  
て大いにし日本陣中より多て和議を調じしは仍り明帝より  
賞福を賜うそその家まで得られとも日本勢は日本國に渡海せ  
劉晋州を去る海にう海が飛万死の當り沈惟敬人先とて大  
に遠怒急ぎ金山浦に去り小西が陣に入し先の約束に遠い晋  
州を城を踰るるを恨むゆ長又沈惟敬人と罵つて汝吾を以て和  
義の心を洗はるといふも悉く実なきの之は和議調ひし日本國  
を引日本國に去るべき不目朝鮮兵所入るに何ぞや吾道日本軍と  
再び王城を踏破んと欲はるるゆもい言を告するは沈惟敬

甚怒り王城に去り李如松人の多て山西に勝りて物渡り兵に  
明國の兵と進むと我輩天子の命と蒙りし倭城を退け  
よここを破られしうゆ多きと乃命りし何ぞ軍とまど  
て引退人や家と抄い沈惟敬人を治とすひ身と及ひいふとと  
沈い急ぎをひし馬石軍が陣を破るその次第は詳  
やきりたる小石軍を先素惟敬人を膝にたれいさまぐりるを破る  
奏候して李如松人の軍と送るとき有勅命りし蓋て李如松人の  
の事源よりる心の内よまはし王城の軍兵所引拂ひ大明に退きけ  
是より向沈惟敬人より和議の心を絶ひ小西の長は姪を  
幼妻を誘ひ日本國自秀若大明の朝廷に渡りしは小西の長は  
拜謁を乞と被り大明國に候ひしは是れ沈惟敬人と小西の長は

いし

いし

真景言い々巻

真景言い々巻



妙長  
 況惟敬と  
 罵ろ圖

貴人より撮へる所ありて日本へいりて國と明王と稱せんと歎きて大明の  
秀の吉海系はたがう唯和睡の殿にせんとのことと斗りたる愛如松人が  
大軍明國のいへんが余の明の次方くは軍をまら皆海國の文を  
をみせとも日本勢を又勅うに令山浦を先遣ふは朝鮮の軍民を  
き小耀とゆく悲ありと冷方は朝鮮の令侍郎一人一絶の詩をゆりて  
愛如松人より送る其詩の辭は曰く

聞説お軍捲甲還

定知和伐先水間

朝廷若而班師命

不福唇亡齒亦寒

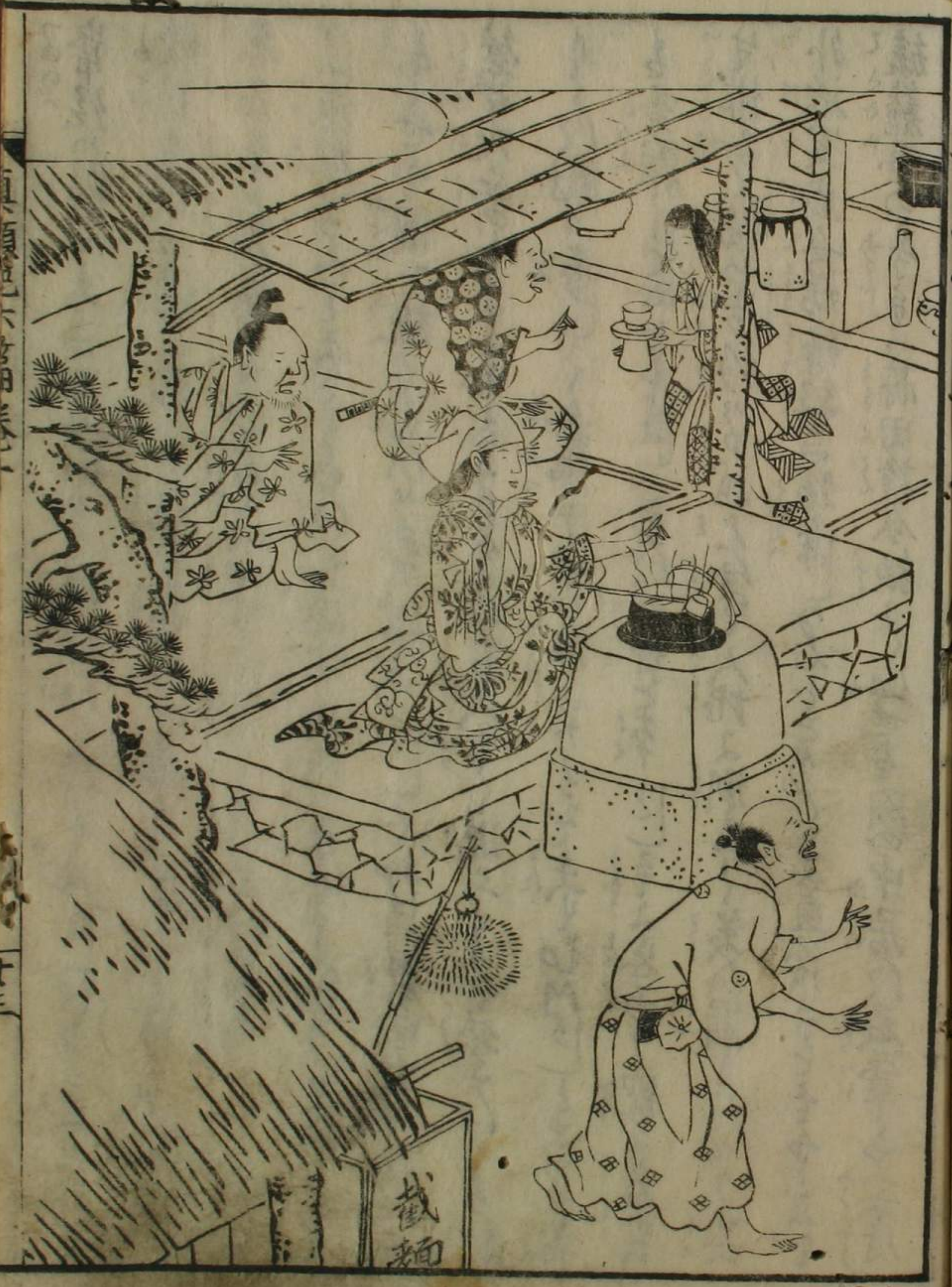
唇亡て齒存しとは古儀なり日本勢いし退るふ大明軍と還り  
去らば獨朝鮮のこむびぬるといふ色とて後より大明の遣ひとめ  
とりの詩の意なり

古園名護屋陣中用瓜島

今年六月七月の以朝鮮の軍も暫く止む古園名護屋の津在陣に  
地よおほしませが何なる長陣の憂を慰むるよりやと津在陣の傍に  
いも廣き瓜島と地ら勢は又旅飯屋若葉酒沽茶店などの  
家瓜島とと藤しく立並べ陣中の諸お等商賈又亭長るんと小岩  
をりままぐの戯れ瓜島にて在陣の勞とをらしぬ先古園の津在陣  
この帷子茶床の腰養と附菅の笠と被まぐ瓜島の勢と荷ひ給ひ  
味よの瓜島せくと喜り給へるふ商人なたるるるく押しと云ん  
方は丹波中納言秀勝御もけ節朝鮮より津見舞のる渡海し  
給ひ是れ中納言の飛らふ出立積物瓜の荷とらぶれありりくの瓜石  
せくとらつらふ喜たるるま無つしうぬおほしく貞あり小田

ち園津中  
瓜島と  
らうき  
強  
図





其二

真景書局卷十

十三



常任の政のまろきよといより 編修傍の律をばはしげるる文策抄せ  
 倭約の律よりのし給くと頼の夜是るるやうとてつらうくし摩  
 悪多々家の御りる世に似せく後と肩よりけ宿をくくと考る  
 ぐん後任のうあままといひげ之蒲生氏御の茶賣とありを問ふ茶を  
 糸くせを價と強くとひくぞはぎくしく押し若田を以法印の  
 然押比丘のこまよと出立つるそくちまろく肥るるて悪さげるる款  
 りくはけり夢しく念佛やせば佛よかるぞまといひしととらん若  
 もまは後して心ととはし心車に現世と奉じしるよ忠あり 親よ考あひ  
 甘佛へと勤め歩ゆるるんましく人地は例ましく多し崩したる其  
 外神宮虚を倍倍神致き猿降しるんととりくよ貞の孤まといとを中み  
 猿籠屋の考りる若田捨奴顔とく似せ古問の中居の茶賣といふ女房

白き衣きてまろこの後とと茶賣はし美紅の湯けけて彼猿籠屋の女と  
 あり今一人を問の所じりしにけり考裏とつふ女房考方る猿籠の  
 冷よ南堂取巾とつり茶店に座りし茶きじりし人後取し付  
 らふと心は茶賣と交わく強飯を甘破截まも押しすけけ方ま書  
 体と通し世給人やとを問の所ををえらるるらよ入身れがを問の目  
 りく真と給ふの限りはし清お母のく茶賣の店に座りて酒飲  
 肴喰ふりり猿飯亭と体とて切飯給る者ありとらぐの戯と  
 何とそつしうぬらうさまよ長陣のつらまをそしりらる

後及又兵衛官六之助斬虎

朝鮮在陣の渚とねい令山浦名 若公構へを瀧り殿帝之明朝和  
 膝のまろいふ急ち王城を斬崩とんきそ期とてけに急暖せる者は

或曉多承政の陣中賊は強きまびとくは敵の夜討を  
考ぬらんと承政薙刀掲げ舟楫に下り先をひらるふ巨虎一疋陣中の馬  
唇をへく馬と喰ひたり兵卒怒ましく合若し菅六之介政利と云  
若刀引上げ走り向ふ彼大虎怒り猛りて証来り政利飛らげて虎の  
腰骨を八寸身切込りけ虎を押し大きくふかき急怒りて先と揚  
立より既危くははしう後反る言傍政次証来り肩先より脊骨  
をうけて斬りたり政利得たりとち方後述「虎の肩間と切割後  
二人のふん虎と殺しぬ多承政先と刀々々條等先陣に進むる石  
を心より竹太おのりして歎と勇と事ふる長丸は」と不與け小  
えたれい兩人相かくて退きたりけ政利が刀の俵を去次が此之波朝の  
後林羅山移りて南山と号し周處が白額虎の故の之銘と曰

節彼南山山惟劍建昔政除去皓使馳奔截邪斬後惟  
力在鞘惟其言虎若真傷竹之弟世ある線常

朝鮮在陣の討多承政虎將をせしとて人々は膽寒とれり其  
兇怪なりび悉一本と曰く朝鮮援張とて承政虎將せしは府虎一疋  
人の群る方と証来り六之介が足腰の肩を唾て後又助け一人をも  
腕とて倒しりるが六之介を日暮陰の具足と着りりるが瓜目よけ  
ん忽ち飛りりしを六之介二尺三寸あるる舌次と袖と切せり  
紫押大徳寺と菴和尚其力は奴死奉と名を付り戦國の藩虎  
狼の國と人の口ををたてわら右付り林羅山も是も銘あり  
南山の銘本文と同じ  
羅山文集より書虎の下に夫々の二字あり序の初も右より



真頭  
七  
下  
女  
用  
卷  
下

七  
八

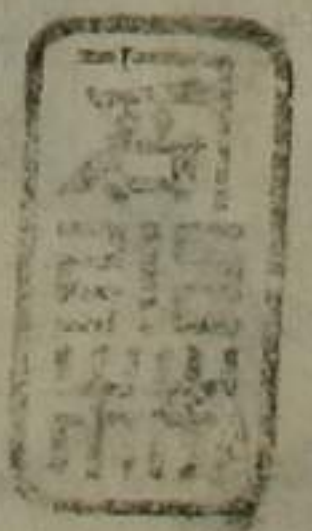
後  
夏  
之  
兵  
清  
菅  
六  
之  
助  
虎  
を  
斬  
る  
圖



真頭  
七  
下  
女  
用  
卷  
下

九  
五

亦の事きこ曰いく金山やま浦うらをみ出いき過すすの死し人ひと獲と得えずやの罾とら林はやしにある  
 ときれが毛けを喰くんとと虎とらまく出い来きまる日ひの猪ぶらお食く後ごて虎とら將しやう  
 をせしまるふ吉きち川がわ廣ひろ家や長なが足あしのてふを全ぜん全ぜん矣や身みの巨き虎とらといはれ捕とらを  
 圖とら獻けんしるふを圖とら其そのせを執とらび給ひく亦また獲と得えずをと中なへに収とらむこと  
 我われ武ぶ徳とくの漢かん去きりき蓋たきのてとり廣ひろをとりて附つけし御ご食じ膳ぜんをと揚たげし宜よろしき事こと  
 再またびと虎とら將しやうにおしり附つけし廣ひろのとりを捕とらへし日ひをとりて執とら送とらしるふを圖  
 捕とらへしてしらふこひ給たまひし由よしのとりを書かきて下くだされるといふも也なり



繪事古圖記六編卷之十終

